

---

# クワガ・スタッグ!

サドル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クワガ・スタッグ！

### 【Nコード】

N5511Z

### 【作者名】

サドル

### 【あらすじ】

2013年8月、日本  
数百年に一度、土地に溜まった霊力が解放される？祭？と呼ばれる月

霊力を使い、人々のイメージと素体となる甲虫を元に顕現した5人の鍬神と、それに乗じて不完全な肉体を得たイレギュラー雑蟲たちそしてそれに不本意ながら巻き込まれてしまった高校生、辻<sup>ツジ</sup>行雲<sup>イクモ</sup>は、どういわけか大鍬の神、柵<sup>クヌキ</sup>と同居することに！

5人の鍬神と主人公の繰り広げるギャグとバトルとハーレム中心の

ファンタジーライトノベル風味（意味不明）

## プロローグ 「クワガタのお姉ちゃん」

月の大きな夜だった。

まだ日の出ていた頃の体にへばりついてくるような暑さは心地よい夜風へと変わり、天蓋の海に瞬く無数の星たちが気分を清涼な物にしてくれる、そんな夏の夜。

街灯は決して多くなく人気も無い田舎の小道、そこには小さな体を震わせながら歩を進める一人の少女の姿があった。

まだ幼さの残る顔立ちやようやく起伏が現れ始めた発展途上のその身体は多く見積もって中学生、もしくは小学生高学年。

そんな少女が丁寧に梱包されたノートを両手に抱え、やたら周囲を気にしながら夜道を歩いていた。

少女が怯える理由、なんてことはない。

ただ日も暮れた後、少女は明日の授業に使うノートが切れていたことに気付き、近くのデパートまでノートを買に行つてその帰宅途中、何かの拍子で今朝見たニュースで取り上げられていた通り魔事件の事を思い出してしまい必要以上に敏感になっているという、ただそれだけの話

いや、ただそれだけの話？ だった？

少なくとも数分前、もっと正確に言えば少女が？ ソレ？ を見つめるまでは

「……？」

唐突に、少女はある一点だけを見据え歩みを止めた。

少女の視線の先、そこにはなにやら暗闇の中で蠢く何かの影が。

「……！」

少女は小さな胸に買ったばかりのノートを抱きしめ、得体の知れない恐怖からくる震えを抑える。

まさかそんなはずはない、そう、アレは多分ここらへんに住んでる野良猫か何かだろう、気にする必要はない。

必死で自分に言い聞かせ、やっとの思いで少女は再び歩み出す。

しかし、自分の予想はどれも間違이었다、それに気付いたのは少女がその影との距離を数メートルを切った頃。

ぼとん

丁度影のいる辺り、まるで湿ったボロ雑巾のような何かが落ちる鈍い音が少女の耳に届く。

勿論恐怖心はあった、しかしその反面膨れ上がるのは余計な好奇心。

少女はその影の背後を通るその瞬間、好奇心に負け、音のした方向へ振り向き　そして後悔した。

「え　？」

少女の腕の中からノートが滑り落ち、アスファルトの上を跳ねる。

猫。

ボロボロに、グズグズに腐敗して、酷い腐臭を放つ猫の姿がそこにあつた。

「　　っ!？」

少女の声にならない叫びが辺りに響き渡る。  
それがいけなかった。

何故ならそれは？彼ら？に自らの存在を知らせてしまったのだから

「ジ……ジジッ……ジ」

先程の声で少女の存在に気付いたのか、形容し難い音を立てながら影はこちらに振り向く。

少女は目を疑った。

何故ならソレは人ではなかったから。

ソレはまるで無数の小さな粒が集まり無理矢理人の形を成しているかのような 異形の怪物だったから。

「ひっ……！」

逃げなくては ！

本能がそう警告し、少女は不気味に蠢く異形の怪物を視界に捉えながら二、三步後ずさる。

しかしそれ以上足が動かない、動いてくれない。

恐怖という名の鎖が少女の足を、腕を、口を、全身を縛り上げ、動くことを許さないのだ。

「ジジ……ジジジジ……」

恐怖に顔を歪め硬直する少女の顔に怪物の手が、否、手の形をした物が迫る。

ざわざわと蠢きながら眼前に迫るその手は少女の恐怖心を加速させ、少女の目には涙が滲み出す。

もうその動きが空気を通じて伝わってくるほど近くにソレがある。先程の猫の死骸の映像が頭の中を何度もフラッシュバックし、まるで脳を焼き切るようだ。

恐らく自分もあなる。特に抵抗もできないまま、特に何もできないまま。

だから最期、最期に無意味で無駄で、そしてささやかな抵抗を

「誰か」

助けて。

少女がその一言を言い終える事はできなかった。

理由は、言う必要が無くなったから。

もっと言うならば目の前の異形の怪物は、現れたもう一つの影によつて殴り飛ばされたからだ。

「ジジッ」

顔の辺りを渾身の力で殴られた異形の怪物が体の一部を散らしながら地面を転がる。

不意打ちだったこともあるのだろう、怪物はそのまま勢いよく壁に叩き付けられ派手な音を立ててようやく勢いを殺した。

「え………?」

少女は未だに何が起きたのか分からないと言った様子できよとんと目を丸くする。

そして少女はしばらくしてからはつと我に返り、視線を地面に這いつくばる怪物からもう一方の影に移した。

もう一つの影の正体、それは紛れもなくただの人間。

暗がりによく見えないが体格と乱雑に切り揃えた黒髪から察する

に間違いなく男性だ。

身長は175？前後、歳は……高校生くらいだろうか。  
何処からどう見ても一般的な、平凡な、ただの、人間。

「女の子が助けを呼ぶなんてシチュ、こんな雑虫程度に使うのは勿体無さすぎる、今後のために大事に取っつけ」

青年はおおよそこの状況にはそぐわない余裕に満ちた表情で冗談っぽく言う。

一見、男性に鍛えていると言った様子はない、ではこの自信の根拠は一体……？

安堵よりも先にそんな事を考える少女の訝しげな表情を読み取ったのだらう、青年はこう切り出した。

「ん、ああ、期待しないよう言うておくけど別に俺は強くもなんともないぞ、普通の人間

さっきのは油断してたから偶然決まっただけで……マトモにやり合ったら多分確実に負ける」

青年はそんな重大な事を危機感皆無と言った様子で少女にさらりと告げる。

見ると先程青年に殴り飛ばされた異形の怪物はもうすでにダメージを回復し終えたらしい、非生物じみた不気味な動きで今にも立ち上がろうとしていた。

「そして案の定さっきのでは倒せてない……と、やっぱり成り損ないといえ神様だな」

青年はぶつぶつと何かを呟いている、が、この際問題ではない。

少女の顔には再び焦燥と恐怖の色が浮かび上がる。



「ど……どっするの……？」

そんな状況に耐えかねたのか、少女の口について思わず言葉が出てしまう。

視線の先ではすでに怪物が体勢を立て直し、こちらへ狙いを定めていた。

にも関わらず青年は構えを解き、そして一言。

「なあに心配するな、そういうのは全部アイツの仕事だからな」

アイツ？

少女がそう聞き返そうとしたのと、ほぼ同時にそれは起こった。

「よくやったぞ行雲、後は任せろ」

どこからともなく聞こえてきた良く通る女性の声。

直後、異形の怪物の上半身が何の前触れもなく消し飛んだ。

「え……！？」

ざわざわと音を立てて霧散していく怪物の上半身。

少女は驚愕の声をあげて辺りを見回す、すると案外ソレは早くに見つかった。

ここから少し離れた樹の枝の上　そこに彼女はいたのだ。

黒を基調とした鎧、艶のある腰まで伸びた黒髪、そして女性の右手に握られているのは少女の細腕には見合わぬ身の丈ほどの黒く輝く巨大な大剣。

頭从天辺から足の先まで、全てが黒、黒づくめ。

しかし彼女はこの夜の闇の中、まるで彼女の周りだけ空間を切り

取ったかのように？浮いていた？

「…………随分遅かったな」

行雲、そう呼ばれた青年が樹の上からこちらを見下ろす女性に皮肉を込めて吐き出す。

「すまんな行雲、丁度出発しようと思っただら電話がかかってきてな、丁寧に小一時間ほど応対していたら予想以上に時間を食ってしまった、なんでも菅原さんという人物に用があつたらしい」

「間違い電話じゃねーか！ っていうか人の家の電話勝手に出んな！」

青年が声を荒げて木の上に立つ黒づくめの女性にツッコミを入れる。

しかしそれでも黒づくめの女性は毅然な態度を崩さぬまま青年に問いかけた。

「それより、あの雑蟲の素体は何だ？」

女性の鋭い目つきが青年から雑蟲と呼ばれた異形の怪物へと向けられる。

怪物は上半身が吹き飛ばされたというのに、未だ活動を停止してはいなかった。

残った半身がざわざわと蠢き、下半身だけで活動を再開する。

「…………見ての通りだ、どうも一個体じゃないらしい、知名度も素体自身の力も最下級

殴った時の感触が手応えなさ過ぎた、加えてあの羽音は…………恐ら

くシヨウジヨウバエか何かの類だろう」

「これはまた面倒な……まあそれさえ分かれば十分だ」

黒づくめの女性が手に持った背の丈ほどの巨大な剣を構え、未だ蠢く怪物の下半身を鋭い目つきで捉える。

「人間の少女よ、覚えておくがいい」

黒づくめの女性の構えた剣が輝きを失う。

それと同時に道路端に申し訳程度に設置された街灯がジリジリと音を立てて激しく点滅を始めた。

「我が名は大鍬の神、分かりにくければ」

そして黒づくめの女性は今にも折れそうな細い木の枝をバネのようにならせ　　一声。

「クワガタのお姉ちゃんと呼ぶがいい！」

その日、その瞬間。

時間にすればほんの数秒だったが、町中のあらゆる明かりが、消えた。

## 第一話「何か甘いものを」

2013年7月31日、この俺、？<sup>ツジ</sup> 行雲？<sup>イクモ</sup> にとっては高校生  
活二度目となる夏休みの前日。

夏休み この単語が素直に喜ばなくなったのは何時からだっ  
たらう。

何故か、そんなのは決まっている。

まずはこの問答無用の暑さ、説明不要、鬱陶しいったらありや  
ない。

こんな猛暑日におおよそ人語とは思えない奇声を上げながら走り  
回っている小学生を見ると本当に同じ生き物なのか心配になってく  
る。

次に物理的にも精神的にも俺を圧迫してくる鞆の中の山のような  
課題。

解答用紙を丸写しするのは確定としても……やはり多すぎる。

これでもし自由研究があったら俺は夏休みを使って国外逃亡す  
るつもりだ。

まあ他にも理由は色々あるが、以上、俺が夏休みを嫌う理由  
いや、少し語弊があった、別に夏休みが嫌いと言う訳ではない、  
ただ夏休みという単語を聞いて一言で言い表せないような微妙な表  
情をってしまうだけだ。

……まあそれでも休みというのは嬉しい限りである。今年の夏は  
未だにお互いを名前呼びをしているウチのバカップルが20回目の  
新婚旅行でオーストラリアへ向かい不在なのでやりたい放題だしな  
だが夏休み明けのテストが強敵だ、そこで赤点を取ってしまったば  
二期期はそのハンデを引きづりながら過ごす事となり、二期期の学  
期末テストで苦戦を強いられることは必死だ。

もし落ちてしまえば冬休みに暖房のない化学実験室で補習、何の

冗談だ、それだけは御免こうむりたい。

となれば多少は勉強もしないとマズイだろう。

「国語と英語は勉強しなくても赤点回避できるくらいの点数が取れるから良し……世界史と地理は始業式の一週間前から暗記を始めればなんとかなる。数学は……嫌だ」

そんな事を一人ぶつぶつと呟きながら帰路に行く。

そして、まあどうせこんな計画家に帰って風呂にでも入れれば忘れてるんだろうけどな、などと悟った頃だっただろうか。

俺はアスファルトの道路の一点を眺め、ぴたりと動きを止めた。

「ん……？」

視線の先、そこには道路のど真ん中で光沢を帯びた黒い腹部で天を仰ぎ、じたばたと6つの脚を動かす甲虫　俗に言うクワガタがいた。

「……近くの雑木林から来たみたいだな」

俺は手に提げた鞆を一旦地べたの上に置き、腰を屈める。

仰向けになつたまま起き上がれずじたばたともがくクワガタ、見るとかなり体力を消耗しているようでどこことなく動きが弱々しい。

「……」

俺はしばらくそれを無言で見つめていると、おもむろに人差し指を差し出してばたばたと脚で空を切るクワガタをしがみつかせた。

「はぁ……何やってんだろ……」

深く溜息を吐き出し、指にしがみついたクワガタを落とさないようその場から立ち上がってゆっくりと歩み出す。

そして俺はそのまま近くにある茂みの前で立ち止まり、そこにクワガタを放してやった。

「……ま、夏休み前で浮かれてた、ってことにしておこう」

そう自己完結し、のそのそと土の上を這って歩くクワガタを背にして再び帰路へ戻ろうと踵を返す。

その時だった。

ガサツ

「ん？」

丁度初めの一步を踏み出そうと足を上げた時、まるで俺を呼び止めるかのように背後の茂みからなにやら物音が耳に届く。

大方野良猫か小鳥の類だろうと分かつてはいるものの、やはり人間と言うものは半ば反射的に振り向いてしまう。

この時振り向いたのが、俺にとっては幸だったのか、それとも不幸だったのか。

振り向くという選択肢を選んできました今となってはもう分からない。

ただ、これだけは確かだった。

俺の視線の先、そこに黒い甲冑で身を包んだ美少女が仰向けになって目を回しながら倒れていたことだけは

「……ええ」

思わず口をついてそんな声が出てしまう。

仕方ないだろ、帰り道で黒い甲冑を身に纏った女性が倒れていた時の対処法なんて義務教育では習わなかったんだから。

……と、そんな冗談を言っている場合ではない！

「おい！ 大丈夫か！？」

俺は咄嗟に手に持った鞆やらなんやらを投げ出し、茂みをかき分けて地面に倒れる少女の元へと駆け寄る。

外傷は……特に無いが体温が上昇している。発汗は少ない……典型的な熱中症の症状だ。

「良かった……、これなら大丈夫だ」

これならば少し涼しいところにも運んでやってちゃんと水分補給さえさせれば大事には至らないだろう。

俺はほっと胸を撫で下ろし安堵の溜息を一つ吐き出す。その時だった。

「う……」

鎧の少女が小さくうめき声をあげる。

「お……、おい、大丈夫か」

少しばかり呼びかけるのに躊躇してしまっ。

その理由は多々あるが、あえて一つ挙げるとするならば……その少女が予想外に可愛かった事だ。

乱れ一つない腰まで伸びた艶のある黒髪、整った端正な顔立ち、鎧越しでも分かる引き締まった身体。

どこか神聖な雰囲気を感じさせるそれはまるで作り物のようで

「……もの……」

「え？」

少女の唇が微かに動く。

何かを呟いているようだが聞き逃してしまった。

なので俺は全神経をその少女の言葉に集中させ、耳を傾けて……

「何か……甘いものを……」

ばかり。

それだけを言い残して少女は気を失う。

これが、鎧の少女と俺、辻行雲の最初の出会いだった。



## 第二話「何だコイツ」

ここは辻邸、すなわち自宅一階のリビング。

あるものといえば他の家より少し大きめのテレビとアンティークな横長のソファが二つ、あとはカレンダーとか時計とか電話とか…まあ要するに普通の居間。

クーラーから吹き出される心地の良い涼風が部屋の中を満たし、外の世界とは隔離された楽園を創り出す。

そしていつもソファの上でイチャついてるウチのバカツプルの不在につき一層理想郷へと近づいたその部屋の中心、そこに彼女はいた。

「すう………」

黒く重厚な鎧を身に纏ったまま、リビングの中心を陣取るソファの上で心地よさそうに寝息を立てる黒髪の少女。

そう、あの後俺はあのまま放っておくという訳にもいかず、結局自分の家まで少女を連れ込んでしまったのだ。

「どうしたもんか………」

カーペットの上で胡坐をかき、水の入ったコップを片手にした俺は溜息交じりに一言漏らす。

勢いで自分の家まで連れてきてしまったが……よくよく考えたら行き倒れの女の子を自分の家に連れ込むって結構危険じゃね？ などと今更ながら後悔の念も覚え始める。

それにこの少女……見るからに面倒事の匂いがするのだ。

特に少女の身に纏う鎧……。

初めはただのレイヤーか何かだと思っていたのだが、どうやらレプリカの類でも無いらしい、ここまでコイツをおぶって来た俺が言うのだから間違いない。

顔立ちは何処からどう見ても日本人だが……今の平成の世で鎧姿？ どれだけ流行に乗り遅れたらこうなるのだ。

「……ま、細かいことは後で直接本人に聞くか」

ソファの上で未だ寝息をたてている少女を一瞥し、コップに注がれた水道水を飲み干す。

介抱してやった甲斐もあってか少女の容態は初め会った時に比べ大分安定していた。

その内自ずと気が付くはずだ。

「俺も大概だな……」

ふう、本日何度目になるであろう溜息を吐き出し、物思いにふける。

俺にはこの少女を放っておくという選択肢も十分あったはずなのに、俺は迷わずこいつを助けるといふ道を選んでしまった。

……自分でも損な性格だというのは分かっているつもりだ、でも多分これは死ぬまで直らない。

どうしてこんな性格になってしまったのか、確か何か理由があったはずだが……

「……」

……っと、そうこうしている内にようやく鎧の少女もお目覚めのようだ。

「お、やっと起きたか」

「……………」

少女は俺の声など聞こえていないと言った様子で薄く目を開き、訝しげな表情で天井の一点を見つめる。

そしてしばらくそうしていたかと思うと、少女は唐突にソファから跳ね起き、辺りの様子を見回し始めた。

上下左右、何度も自分の置かれた状況を確認するように視点を動かし、そして最後にその視線が行きついたのは少女の足元でカーペットの上に胡坐をかく俺。

すると黒い鎧を身に纏った少女はソファの上から上半身だけを起こした体勢で、その吸い込まれそうな二つの黒い瞳の中に俺の姿を映したまま、固まってしまった。

「えーと……………大丈夫か」

さすがにちよつと心配になってきたので、少女にそう問いかけてみる。

すると少女はそれでようやく我に返ったらしく、何故か殺意を込めた目で

「貴様……………！」

「え？」

直後 俺が理解するよりも早く、ソレは起きた。

少女は先程まで寝込んでいたとは思えないほどの俊敏な動きでソファから飛び降り、こちらに向きを転換。

そして間髪入れずに、少女は肘から腕をすっぽりと覆った籠手で

俺を突き飛ばし、そのままカーペットの上に押し倒したのだ。

「なっ……!?!?」

「動くな人間、少しでも動けば喉を潰すぞ」

一瞬の事で頭の中が真っ白になる俺に対し、少女はそうささやく。まさか本当にそんなことするわけがない、そう頭の中で自分に言い聞かせてみるが、首に伝わってくる籠手の冷たく金属質な感触と彼女の迷いのない語気はそれが真実であるという事を告げていた。

なんとか少女を跳ね除けようとするも、それすら叶わない。

甲冑に覆われた彼女の細腕は、どれだけ俺が力を込めようとビクともしないのだ。

「……ふむ、しかしまさか人間に見つかってしまつとは……私らしからぬ失態だ」

少女は俺が抵抗しなくなったこと、否、抵抗しても何もできないことを確認すると、そのまま誰に言う訳でもなくぶつぶつと訳の分からない独り言を呟きはじめた。

「この人間一人生かしておいたところで別段何の損もないが……人に話され騒ぎにでもなつたら私が動きにくくなる。人間を殺すのは初めてだが……仕方ない」

何か物騒な事を呟いていたかと思うと少女はこちらへ向き直り、その射抜くような双眸で俺の顔を見つめる。

そして少女は俺を抑えている方とは逆の手を振り上げ、貫手の構えを取った。

……えーと、今の話の流れからしてもしかすると俺、見も知らぬ

鎧の少女に訳も分からないまま……殺される？

「多少私怨も混ざってはいるが……まあそういうことだ、悪く思っ  
なよ人間」

少女の目つきが一層鋭くなり振り上げた手に力がこもる。

狙いは喉、と言ったところだろうか。

成る程、あの少女の圧倒的な腕力で、あの甲冑に包まれた腕に突  
かれればひとたまりもない。

が、当然こちらとて自分が殺されると分かっているが黙っているは  
ずが ない！

「悪く思っわこの電波女がああああ！」

俺は押し倒された体制のまま両膝をたたみ、そして渾身の力を込  
めバネのように縮めた足を突き出す。

突き出された足は少女の胴体にクリーンヒット。

「ぐっ……！？」

咄嗟に働いた火事場の馬鹿力。

それは完全に油断しきっていた鎧の少女の体を少しながら浮かし、  
それによって少女はバランスを崩す。

勿論、それに伴って少女の手に込めた力も若干緩み、俺はその隙  
に少女の拘束から抜け出して部屋の端まで移動、少女との距離を取  
った。

「小賢しい真似を……！」

どうやら少女も体勢を整え直したようで、鷹のように鋭い二つの

眼が再びこちらへ向けられる。

「いいだろう……無抵抗の者を殺すというのは多少なりとも罪悪感がある……ならば」

鎧を纏った少女はそう言うと、何を思ったのかその場で上半身を屈め掌を床につく。

するとどういいうわけか何の変哲もないはずの家の床が光り出し、そして少女が掌を上にあげる動作に合わせ、床から少女の身の丈ほどもある黒く巨大な鉄塊　いや、巨大な一本の大剣が現れた。

「私の？黒金剛？で跡形もなく消し飛ばしてくれろ！」

その刀身を完全に露わにし宙に浮かぶ黒い剣。

少女はその剣の柄を手に取り、そしてその数百キロは下らないだろうと言ったその剣を、あるうことかその細腕で軽々と構えたのだ。

「ま、マジかよっ!？」

勿論俺も驚きを隠せない。

しかし、そんなのはお構いなしと言った様子で鎧の少女は大きく踏み込む。

まるで剣など持っていないかのような俊敏な動き、少女はそのまま俺の懐まで潜り込んで

「貰った！」

「しまっ　！」

少女が大きく剣を振るう。

下段からの切り上げ、避けることは……できない。  
そう悟った瞬間、世界がまるでスロー再生のようにゆっくりと動き出す。

黒く鈍い輝きを放つ大剣は、俺の顔めがけてゆっくりと迫り、空気をかき回し、空間に光の軌跡を描いて

ぐう

「え？」

ゆっくりと動く世界に響き渡るところか間抜けな音。

その直後、少女の手に持った剣は少女の手をすっぱ抜けてどこかへ飛んでいく。

後方から鳴り響くすさまじい破壊音、全身の血の気がさーっと引くを感じるも振り返ることはできなかった。

何故なら、手に持った大剣を失った鎧の少女はそのまま力なく前のめりに倒れ、俺に覆いかぶさるように

「いだっ!?!」

鎧の少女と壁にサンドイッチにされ、後頭部に鈍い痛みが走ると同時に世界は元の早さを取り戻す。

そりゃああの剣の一撃を喰らうよりは遥かにマシだろうが……一体何故？

そう思い、俺は俺の体によりかかったまま何も言おうとしない少女に視線を落とす。

すると少女は目を回しながら、一言。

「……なにか……甘いものを……」

……何だコイツ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5511z/>

---

クワガ・スタッグ！

2011年12月23日00時52分発行